

マルコによる福音書 2 章 1-12 節

2014 年 9 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 527 番 「傷ついた人の 祈りにこたえて」

2、お祈り

3、テキストの位置

今回からようやく 2 章に入ります。1 章でのガリラヤ伝道のあと、イエス様は四人の漁師を弟子とします。そしていやしの記事が続き、

治癒物語	1:21-45	多くの人をいやす
治癒と論争	2:1-12	中風の人をいやすと論争
論争物語	2:13-3:6	宗教指導者との論争

この 2 章 1～12 節の「中風の人をいやし」はその一連の治癒物語の最後に位置します。

さて、マルコ福音書には論争物語が多くみられるのですが、本日の箇所は 3 章 6 節まで続く論争物語の最初の部分ともいうことができます。

つまり、ここは治癒物語と論争物語という重要な二つのテーマの橋渡しの箇所であるともいえるのです。

さて、マルコ福音書には論争物語が多くみられると言いましたが、別の見方をすると、説教集が少ないともいえます。マタイには山上の説教が、ルカには平地の説教が、そしてヨハネには告別説教がそれぞれ収められていますが、マルコにはそのようなものがあまりありません。それはマルコが論争を通してイエス様の言動を生き生きと伝えたからですし、イエス様の言葉集（第 1 回で学んだ Q 資料）が手元になかったからなのかもしれません。

またマルコは、イエス様とユダヤ人宗教指導者たちとの確執を鮮明にすることで、イエス様の受難までの道のりを早くから読者に意識させたかったののかもしれません。

4、1 節ごとに

◆中風の人をいやしと論争

2:1 (そして) 数日後、イエス (彼) が再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、

イエス様の元には大勢の人たちがやってきました。前回の場面でイエス様は公然と町に入ることができなかつたとあります。数日たってようやくこっそりとカファルナウムの家に入ったのでしょう。しかしそのうわさを聞きつけ、人々はイエス様の元に来ます。

2:2 (そして) 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、

前回イエス様がカファルナウムに来た時にも、町中の人たちはイエス様の家に集まりました。そして今回も同じように、大勢の人が戸口の辺りまで、すきまもないほど集められたのです。

わたしは人ごみがあまり好きではありません。梅田や東京で電車に乗ると、まさに身動きできないような状況に押し込まれることがあります。そういう電車に乗ってしまった時に思うことは、自分が降りるとき、どちらのドアが開くだろうか、果たしてちゃんと降りられるのだろうか。



イエス様が人ごみを好きだったのかどうかはわかりませんが、その中でみ言葉を語ります。3章6節まで続く 論争物語の根底にはイエス様のみ言葉があるのです。

2:3 (そして) 四人の男(中風の人)が中風の人を(四人の男によって)(彼のもとに)運んで(ばれて)来た。

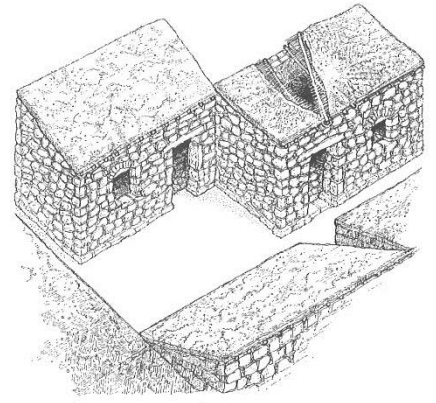
中風(聖書ではちゅうぶと読む)という病気は、広辞苑では次のように書かれています。

中風(ちゅうふう) ちゅうふう、ちゅうぶとも読む。半身の不随、腕または脚の麻痺する病気。脳または脊髄の出血・軟化・炎症などの器質的変化によって起こるが、一般には脳出血後に残る麻痺状態をいう。古くは風気に傷つけられたものの意で、風邪の一症。

原語は必ずしも中風という病気のみを意味する言葉ではありません。一方の「側」を「切り離す、駄目にする、緩む」という動詞で、半身不随の状態を指します。半身不随にも原因は様々ありますので中風と言い切って良いものか、議論の分かれるところですが、ここでは「中風」と書くことにします。

いずれにせよ、ここで大事なことは、患者が一人では歩けない状態にあったということ、床の四隅を四人の男が一人ずつ持ったということは、きっと患者は大人だろうということですから。そして彼は会話などの意思伝達能力は侵されていなかったともいえます。

2:4 しかし、群衆に阻まれて（のせいで）、イエスのもとに連れて行くことができなかったのもので、イエス（彼）がおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人（患者）の寝ている床をつり降ろした（す）。



イエス様の周りには多くの人々が近づいていき、戸口の辺りまですきまのない状態でした。あなただったらどうするでしょうか。中風という病気はすぐに治さないと命にかかわる、というものではありませんでした。イエス様の話が終わってからも、群衆が食事を取りに家に帰ってからも、イエス様に会うことはできるのです。

しかし四人の男と中風の人は「待つ」という選択をしませんでした。当時のイスラエルの家の屋根は、横に渡したはりの上に角材などを組み、その上を木の枝を編んだものや粘土で覆っただけのものでした。またすぐに屋根の修繕ができるように、屋上に上ることのできる梯子を家の外側に架けていたようです。さらに、家には一つしか部屋がないのが普通で、イエス様がいらっしゃると思われる場所は、屋根の上からもある程度想像がついたと思われます。

わたしたちの教会で礼拝をしているときに、突然上から人がつり降ろされてきたら、それは驚くと思いますし、重機などを使わないと不可能でしょう。でもこの頃のイスラエルでは可能だったのです。

2:5 （そして）イエスはその人たち（彼ら）の信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた（う）。

彼らの信仰とは誰の信仰でしょうか。四人の人たちの信仰でしょうか。それとも中風の人々の信仰も含まれるのでしょうか。また「信仰」とは一体何なのでしょう。イエス様を救い主だと信じることでしょうか。

この場面において、「信仰」とはいわゆる宗教的なものではありません。イエス様は何者なのかということが分かったということではなく、イエス様なら何とかしてくれる、イエス様に触れていただけさえすればいやしてもらえると、絶対的な信頼感のみです。また、彼らはイエス様に一言も発してはいません。しかしイエス様は彼らの信仰を見たのです。

ここでいう信仰とは、彼らがイエス様にすぎることしかできないことを知っており、何とか近づこうと決意したことです。中風の人がどのように四人の男に自分のことを頼んだのかはわかりません。しかし中風の方は頼み、そして四人の男はそれに応えようとした。そのお互いを大切にする思いも、イエス様から見たら素晴らしい信仰なのかもしれません。

人々は屋根から人が降ろされてきて驚いたことでしょう。彼を見て、また屋根の上の四人の男を見て、イエス様ならどうするだろうかと思っていたかもしれません。イエス様のことだ。きっと手を触れて病気をいやすに違いないと、弟子たちは考えたでしょう。しかしイエス様は全く関係のない言葉を発するのです。「子よ、あなたの罪は赦される」と。

「罪は赦される」というのですから、中風の人「罪人」なのでしょう。確かに当時のユダヤ社会では、病気はその人（あるいはその親）が犯した罪の結果だと考えられていました。しかし福音書の中で罪と病気が関連付けられているところは、中風の人「いやしの記事」と、ヨハネ福音書9章にある、生まれつき目の見えない人をいやす記事だけです。

当時の社会において、罪人は社会の外に追いやられた人たちでした。また病人も様々な制約の中で生きていかざるを得ない人たちでした。しかしその存在はイコールではなかったはず。しかしイエス様は「罪は赦される」と言われます。その真意は何でしょう。

罪とは何でしょう。それはある特定の人「罪人」が犯した出来事ではなく、すべての人間が神さまから離れてしまっているということです。また赦しはその罪からの解放です。イエス様は中風の人にこう伝えたかったのではないのでしょうか。「あなたはこれから、罪人として見なされるような人生から解放される」と。

2:6 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた（論じた）。

マルコ福音書において、律法学者とファリサイ派は論争の主なる相手でした。伝統的なユダヤ教を守ろうとするその姿勢と福音を宣べ伝えるイエス様とは、至る所で対立していきます。



わたしたちは聖書を読むときに、つい律法学者やファリサイ派を悪役として捉えてしまいがちです。しかし彼らは、自分たちが正しいと教えられてきたことに忠実で、彼らなりに神さまに従っていったのです。けれども、彼らは律法によって人を排斥していくのです。

2:7 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」

ユダヤ教において、罪を赦すことができるのは、神さまだけでした。預言者は神さまに罪の赦しを願う、とりなすことが役目だったのです。したがって、「あなたの罪を赦す」と言うことは、自分を神さまだと思ふことにつながるのです。

2:8 (そして) イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた(う)。「なぜ、(あなたがたは) そんな考え(こと)を心に(の中で)抱くのか(論じているのか)。

イエス様は律法学者の心の中を見抜きます。「霊の力で」と書いてあるように、イエス様の超自然的な能力を、ここでは強調しています。

2:9 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて(なさい)、(そして自分の)床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。

一体どちらが易しいでしょうか。多くの人は「あなたの罪は赦される」だと言います。罪が赦されたかどうかは見た目にはまったくわかりません。ところが「歩け」と言われて歩けなかったら、すぐに神さまの力が働いていないことがばれてしまうのです。

しかし次の 10 節とあわせて見ると、「歩け」と言う方が易しいと考えることができます。

2:10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを(あなたがたが)知らせよう(るために)。」そして、中風の人に言われた。

「あなたがたが知るために」。原文どおりに訳すと、このようにイエス様は言われます。あなたがたがわたしの権威を知るために、わたしは「罪は赦される」と言ったのだとイエス様は言われているように読むことができます。

イエス様は、「歩け」とだけ言って中風の人をいやすことも出来たのでしょうか。でも、論争になるのを承知で、「罪の赦し」という神さまにしか許されていない言葉を用いたのです。それは「人の子」であるご自分には、罪を赦す権威が与えられていることを伝えるために、つまりご自分は何者であるかを垣間見せるために、あえてなされたことなのです。

2:11 「わたしはあなたに言う。起き上がり(よ)、(そしてあなたの)床を担いで(あなたの)家に帰りなさい。」

「起きよ」とイエス様は言われます。1 章 31 節でイエス様はシモンのしゅうとめを起こしました。その時にも言いましたが、「起こす」という語(エゲイロー)は、単に起き上がるという意味の他に、復活するという意味も持ちます。彼の家へと向かう歩みは、新しい命を与えられた喜びに満ちたものなのです。

2:12 (そして) その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆のしている前を出て行った。
(そして) 人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、
神を賛美した (て言った)。

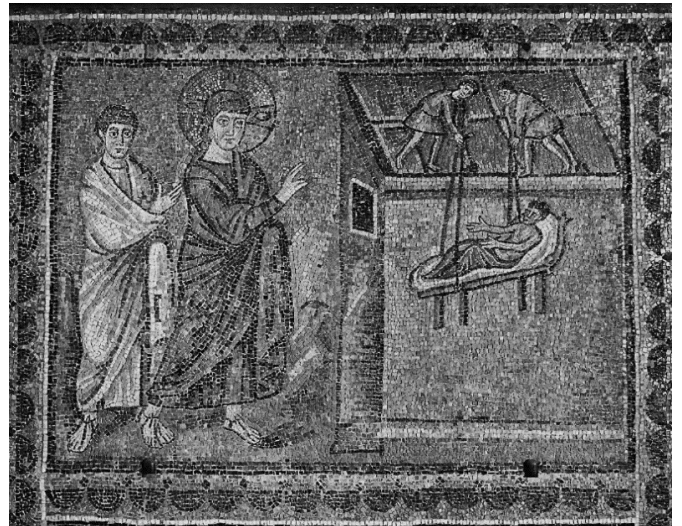
「賛美した」という語は、「栄光」という名詞から作られた動詞なので、「栄光を帰す」という意味です。礼拝の中で福音書が読まれる前に、「主に栄光」／「主に栄光がありますように」という応答がありますが、これを「栄光を帰す」ととらえてよいと思います。

イエス様の奇跡を見て神さまを賛美する群衆の姿は、マルコ福音書においてはここにしか見られません。しかし治癒物語の最後に出てくるこの記述は、イエス様の治癒行為がすべて神さまから出た業、すなわち神さまの出来事であることを示しているのです。

<今回の箇所から>

イエス様はいやしの業の中で、罪の赦しをもおこなっていきます。わたしたち人間は、「良い人 (義人)」と「罪人」という枠組みで人を捉えがちです。他人に対してもそうですし、自分に対してもそうです。

しかしイエス様は罪人に対して働き掛け、罪を赦していくことで、「罪」という壁を崩していきます。イエス様にとって、「義人」と「罪人」の違いなどないのです。



屋根をはがしてイエス様の元に降りてきた中風の人。彼は四人の仲間とともに、自分の前にあった壁を取り壊して救いのただ中へと身を投じたのかもしれませんが。そしてわたしたちも同じように、本来イエス様の前に出ることなどできなかつたにもかかわらず、多くの人たちの助けを受け、壁を壊し、イエス様の元へと連れてこられたのです。そしてわたしたちはイエス様の宣言を聞きます。「あなたの罪は赦される」。

床を担いで家へと促された彼は、その後どうしたのでしょうか。そのまま家でじっとしていたのでしょうか。次は自分が、一步も歩けず苦しんでいる人をイエス様の元へと連れて行ったのでしょうか。わたしたちにはイエス様は、何を望んでおられるのでしょうか。

今回の学びは、これで終わります。次回は 10 月 23 日(木)10 時 30 分～で、「レビを弟子にする、断食についての問答 (マルコ 2 : 13～22)」について学んでいきたいと思ひます。